

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	文学教材の比べ読みにおける有用性の検討：川村たかし『サーカスのライオン』と宮沢賢治『よだかの星』を例にして
Author(s)	中野, 登志美
Citation	論叢 国語教育学, 16 : 52 - 66
Issue Date	2020-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/50692
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050692
Right	
Relation	



文学教材の比べ読みにおける有用性の検討

—川村たかし『サーカスのライオン』と宮沢賢治『よだかの星』を例にして—

中野 登志美

1 研究の目的

川村たかし『サーカスのライオン』は、小学校3年生の国語の教科書（東京書籍）に採録されている作品である。2019年9月上旬に行われたM県の国立大学附属小学校の『サーカスのライオン』の授業実践が、稿者にこの文学教材を取り組む切っ掛けを与えてくれた¹。「じんざ」が「男の子」を炎の中から救い出す、いわばこの文学教材のクライマックスにあたる場面が授業で行われた。この場面のまとめとして、授業者は「どうして、じんざは炎の中に飛び込んで、男の子を助けたのでしょうか。」と子ども達に問いかけた。授業者の問いかけに対して、一人の子どもが「じんざが炎の中に飛び込んで男の子を助けたのは、男の子からチョコレートもらったから。」と答えたのである。この子どもの回答に多くの子ども達が賛同し、授業の終わりではクラス全員の意見が一致した状態で「じんざは男の子からチョコレートもらったから、男の子を救い出した」という読みにまとめられた。しかし、「男の子」からチョコレートもらったことは、「じんざ」が炎の中から「男の子」を救出する理由のひとつに過ぎない。「じんざ」が自分自身の生命にかえてまで「男の子」を炎の中から救い出す理由がチョコレートもらっただけでは根拠として乏しい。

指導書では、『サーカスのライオン』は「中心となる人物の気持ちの変化を考えて読み、感想を伝え合うことができる」力を習得するための単元として設定されている²。この単元では、子ども達に、中心人物の「行動や気持ちを読み取ったうえで、自分がどう思うのか考え」させる³授業を構想することが求められている。このクラスの子ども達の読みは「自分がどう思うのか考え」た読み方にはなっているものの、『サーカスのライオン』の中心人物の行動や気持ちを読み取れていない。このクラスの授業者は、常に教材分析を丁寧に行った上で授業を実践する人物である。授業者は、「じんざ」が「男の子」からチョコレートを受けとる行為の根底に「家族と離れている寂しさや悲しさを男の子に重ねている」ことを読み取っていて、子ども達に「じんざ」が「男の子」からチョコレートを受けとる真意に気づかせようと幾度か発問を試みたが、子ども達の読みが変容することはなく、『サーカスのライオン』の授業は終了した。次の授業においても、子ども達の読みが変容することはなかった。『サーカスのライオン』の単元が終了した後、授業者に「どのように指導すれば、『じんざはチョコレートもらったから男の子を救い出した』という子ども達の読みを変えることができるでしょうか。」と相談されたのだが、その時の稿者は的確な助言をすることができずにいた。だが、『サーカスのライオン』を分析するうちに、この文学教材は、一見すると、「男の子」との出会いを通して「じんざ」の行動や気持ちの変化などがわかりやすく表現されていることから、小学校3年生の子ども達にとって自分と同じような年齢の「男の子」に〈同化〉して読みやすい教材だと捉えられるが、そこに『サーカスのライオン』の〈陥穽〉があるのではないかと考え至った。『サーカスのライオン』の研究論文や実践報告⁴を目にすると、この授業者の悩みは『サーカスのライオン』を指導する教員に共通する課題であることが浮上してきたのである。

例えば、周才規子教諭の実践報告では、「じんざ」の気持ちの変化について、児童一人ひとりの考

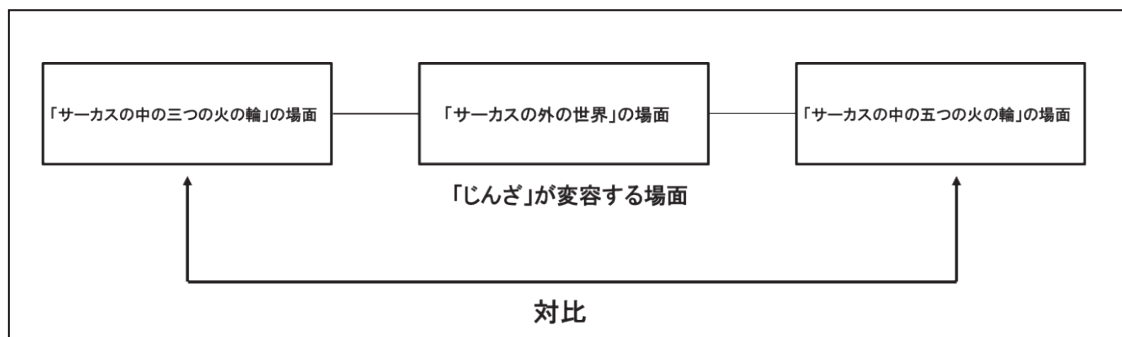
えを書かせた後に3～4人の小グループで話し合い活動を行っている。実践報告の中で話し合い活動の後の児童の感想を二例紹介している。「チョコレートのおん返しはちゃんとできたよ。」や「チョコレートをくれたときうれしかったぞ。」と書いた二人の児童の感想を、周才教諭はじんごの気持ちの変化を理解していると評価している⁵。周才教諭の指導により、話し合い活動の後の児童の感想は「じんご」の心情の変化を丁寧に読み取ったものになっている。しかし、二人の児童は「じんご」が変化した主な要因はチョコレートをもらったからとしか捉えられていない。これは周才教諭の授業実践だけではなく、『サーカスのライオン』の研究論文や実践報告に見られる課題である。この課題に付随するさらなる課題として、炎の中に飛び込んで「男の子」を救ったために命を落とした「じんご」を「かわいそうなじんご」と受けとってしまう児童が少なからずいる⁶。

このような『サーカスのライオン』の課題から脱却するための指導法として、本稿では『サーカスのライオン』と宮沢賢治の『よだかの星』との比べ読みとの有用性について検討することを目的とする。

2 『サーカスのライオン』の教材分析

2-1 サーカスの中の三つの火の輪の場面

『サーカスのライオン』の指導書や先行研究⁷では、「時」を表す言葉によって五つの場面に分けている。物語の中の時間設定に着目して読むことは、読み方のひとつである。しかし、『サーカスのライオン』を読み進めると、『サーカスのライオン』の最初の場面と最後の場面において、サーカスの中で火の輪が出てくるところに特徴が見いだせる。本稿では、『サーカスのライオン』の特徴を生かした読み方として、火の輪の場面に着目する読み方を提案したい。『サーカスのライオン』は、最初の「サーカスの中の三つの火の輪」の場面と最後の「サーカスの中の五つの火の輪」の場面が対比的に構成されている作品である。これらのサーカスの中の火の輪の場面に着目することで、対比的な読み方が可能になり、「じんご」の変容、最初と最後に設定されたサーカスの中の火の輪の場面の意味合い、『サーカスのライオン』のタイトルの意味などを読み深められることが想定される。作品構造の観点から言うと、最初の「サーカスの中の三つの火の輪」の場面と最後の「サーカスの中の五つの火の輪」の場面の間に「サーカスの外の世界」の場面が組み込まれている。『サーカスのライオン』の作品構造を図式化すると次のようになる。



(『サーカスのライオン』の作品構造)

「サーカスの中の三つの火の輪」の場面での「じんざ」は、サーカスで行われる火の輪くぐりの曲芸をする以外は「一日中ねむって」る。「じんざ」は夢の中では「いつもアフリカのゆめを見た。ゆめの中に、お父さんやお母さんや兄さんたちがあらわれた。草原の中を、じんざは風のように走っていた。」とあるように、サーカスにいる「じんざ」は、アフリカにいる家族と離れ離れになって常に孤独で、悲しく寂しい想いを抱きながら生きている。本来、ライオンがいるべき場所はサーカスではない。今の自分がいる現状から解放されて、アフリカの草原で家族とともに生きたいという「じんざ」の心からの願いが夢となって現れている。「じんざ」の「毎日、同じことばかりやっているうちに、わしはおいぼれたよ。」という台詞から、長い間、サーカスにいる「じんざ」にとって、サーカスでの火の輪くぐりの曲芸は日常と化していることがわかる。そのために「ライオンつかいのおじさん」がよそ見をしても、「じんざ」は「二本でも三本でも、もえる輪の中」を何度もくぐりぬけることができるのである。

この場面での「じんざ」から、家族に再会してアフリカの草原を思いっきり走りたい、もう一度ライオンとして生きたいと願いながらも諦めている様子を読み取ることができる。

2-2 サークスの外の世界の場面

「サーカスの外の世界」の場面で「じんざ」は変容する。「男の子」との出会いが「じんざ」を変えるのである。では、「男の子」はどのような人物なのだろうか。「じんざ」と「男の子」の会話から「男の子」は次のように表現されている。

「ライオンがすきなのかね。」

「うん、大すき。それなのに、ぼくたち昼間サーカスを見たときは、何だかしよげていたの。だから、お見まいに来たんだよ。」

じんざは、ぐぐっとむねのあたりがあつくなった。(中略) 男の子のお父さんは、夜のつとめがあつて、るす。お母さんが入院しているので、つきそいのために、お姉さんも夕方から出かけていった。

「ぼくはるす番だけど、もうなれちゃった。(後略)」

ライオンを大好きな「男の子」が、サーカスにいるライオンが体力のみならず気力も失っている様子を心配していることを知って、「じんざ」は「男の子」の優しい想いに心を打たれる。「男の子」は父親・母親・姉がいながらも、なかなか会えない状況でいつも寂しい想いをしているのに、ライオンの「じんざ」を思いやる心の優しい少年である。「じんざ」は家族と離れ離れになったつらい境遇にいても他者を思いやる「男の子」を今の自分と重ねる。「じんざ」は家族に会えない悲しさや寂しさを誰よりも痛感している。だからこそ、「男の子」と出会ってからの「じんざ」は、ライオンが大好きだと話す「男の子」を自分のように心寂しい想いをさせたくなくて、以前のように眠らずに、毎日「男の子」が来るのを待っていたり、「男の子」から好きではないチョコレートで「目を細めて」受け取ったり、「男の子」の話を身を乗り出してうなづいて聞いたりする。「男の子」が「じんざ」にチョコレートを渡すのは、「じんざ」に対する優しさや思いやりの表れた行動であると「じんざ」は理解している。そのために「じんざ」は「すきではな」いチョコレートを喜んで受け取るのである。つまり、「じんざ」が「男の子」を炎の中から救い出すのは、「男の子からチョコレートもらったから」とお菓子をもらったという理由ではなく、数いる動物の中でもライオンが

大好きなこと、元気のないライオンを心配して毎日見舞いに来る優しさ、自分と同じような家族と離れ離れの境遇にいることなどが根底にある。

サーカスが明日で終わりとなった日に「男の子」から母親が退院することを聞いた「じんざ」は、体力も気力も取り戻して、これまでの自分とは違う火の輪くぐりの曲芸を「男の子」に見せようと決意する。「じんざ」にとって「男の子」は元気づけてくれる大切な存在になっていた。サーカスが町から去って会えなくなっても安心してほしかったのである。「じんざ」にとって「男の子」は大切な存在であることが、次の文章から読み取られる。

その夜ふけ……。だしぬけに、サイレンが鳴りだした。「火事だ。」と、どなる声がした。うとうとしていたじんざははね起きた。(中略) 男の子のアパートのあたりが、ぼうっと赤い。ライオンの体がぐうんと大きくなった。

じんざは、古くなったおりをぶちこわして、まっしぐらに外へ走り出た。足のいたいのもわすれて、むかし、アフリカの草原を走ったときのように、じんざはひとかたまりの風になってすっとなでいく。思ったとおり、石がきの上のアパートがもえていた。(中略)「中に子どもがいるぞ。たすけろ。」とだれかがどなった。「だめだ。中へは、もう入れやしない。」それを聞いたライオンのじんざは、ぱっと火の中へとびこんだ。

「だれだ、あぶない。引きかえせ。」後ろで声がしたが、じんざはひとりでつぶやいた。...
「なあに。わしは火には、なれていますのじゃ。」

けれども、ごうごうとふき上げるほのおは階だんをはい上り、けむりはどの部屋からもうずまいてふき出していた。じんざは足を引きずりながら、男の子の部屋までたどり着いた。部屋の中で、男の子は気をうしなっていたおれていた。じんざはすばやくだきかかえて、外へ出ようとした。けれども、表はもう、ほのおがぬうっと立ちふさがってしまった。石がきの上のまどから首を出したじんざは、思わず身ぶるいした。高いので、さすがのライオンもとび下りることはできない。

じんざは力のかぎりほえた。

ウォーッ

(下線はすべて引用者による)

この場面は『サーカスのライオン』のクライマックスにあたる場面である。「男の子」の身の危険を感じた「じんざ」は、下線に示したように、体を「ぐうん」と大きくしておりを壊し、怪我をした足を引きずりながらも「まっしぐらに」風のように走る。燃え立つアパートの中に誰も進入できないことを知った「じんざ」は「なあに。わしは火には、なれていますのじゃ。」と自分に言い聞かせて火の中に飛び込む。火には慣れている「じんざ」であっても、自分に言い聞かせなければ進入できないほどの火災であった。おそらく「じんざ」も燃え立つ火の中に入ることに恐怖を感じたのであろうが、恐怖心よりも「男の子」を救い出したい気持ちの方が強く、自分を奮い立たせて炎の中に飛び込んだ。歩くのでさえ大変な状態なのに、足をひきずりながら炎の中を探し回り「男の子」を見つけだす「じんざ」から、なんとしても「男の子」を助けたいという様子を看取できる。炎の中から「男の子」を見つけ出したものの、石垣の上の高い場所にあるアパートが燃えてゆく中で、「男の子」を抱きかかえては、もはや降りることができないと悟った「じんざ」は「ウォーッ」と力のある限りたけり立つ。「じんざ」の「ウォーッ」という叫びは、ライオンとしての本能を呼び覚ました声である。

風にのったほのおは真っ赤にアパートをつつみこんで、火の粉をふき上げていた。ライオンのすがたはどこにもなかった。

やがて、人々の前に、ひとかたまりのほのおがまい上がった。そして、ほのおはみるみるライオンの形になって、空高くかけ上がった。ぴかぴかにかがやくじんざだった。もう、さっきまでのすすけた色ではなかった。

金色に光るライオンは、空を走り、たちまちくらやみの中に消え去った。

(下線=引用者)

自分の危険を顧みずに「じんざ」が燃え立つ炎の中に飛び込んで「男の子」を救い出せたのは、「男の子」が大切な存在になっただけではなく、火災で命を落としたら、もう二度と「男の子」は家族に会うことができなくなるという思いがあった。「じんざ」は眠っている時にいつもアフリカにいる家族の夢を見ている。それほど日々家族を恋しく想い、家族に再会したい気持ちが強い。

「じんざ」にとって「男の子」を炎の中から救い出す行為は、死を賭した行動である。「男の子」を救い出すことができたのは、「じんざ」のなんとしても助けたいという意志から生じた行動力による。この行動によって、「じんざ」は命を落とすことになるが、かつての「すすけた色」の「じんざ」ではなく、「ぴかぴかにかがや」いて「金色に光」っている「じんざ」となった。「ぴかぴか」に輝く金色の「じんざ」の姿には、「男の子」を救い出せたことに対する「じんざ」の満足感や達成感が表現されている。そこには「男の子」と出会わなければ命を落とすことはなかったという「じんざ」の感情はない。「男の子」を助けたいという懸命な思いが、「じんざ」をライオンとしての本能を呼び覚ますことになった。結果的に、「じんざ」をライオンとして生きることへ解放したのである。「じんざ」が、ライオンとしての本能を呼び覚ましたことが、『サーカスのじんざ』ではなく、『サーカスのライオン』というタイトルとして表されている。

2-3 サーカスの中の五つの火の輪の場面

最後の「サーカスの中の五つの火の輪の場面」には、「じんざ」の姿はない。

五つの火の輪はめらめらともえていた。だが、くぐりぬけるライオンのすがたはなかった。それでも、お客は一生けん命に手をたたいた。

ライオンのじんざがどうして帰ってこなかったかを、みんなが知っていたので。

最終日のサーカスの火の輪は五つである。「じんざ」は自分が元気を取り戻したことを「男の子」に知らせるために、「わかいときのように」五つの火の輪をくぐり抜けようと「目をぴかっと光」らせて決めていた。そう決意した「じんざ」は、かつてのように目が「白くにご」って「しょげている」「じんざ」ではなくなった。サーカスの最終日に五つの火の輪をくぐり抜ける「じんざ」の姿はないのだが、観客の心の中には、五つの火の輪をくぐり抜けている「じんざ」が存在している。五つの火の輪に向かって観客が「一生けん命に手をたた」くのは、炎の中から「男の子」を救い出した「じんざ」の勇気のある行動を褒めたたえているからである。五つの火の輪には「じんざ」の姿はないけれども、観客の心の中に五つの火の輪を軽やかにくぐり抜ける「じんざ」の姿がある。観客の心の中で「じんざ」は〈再生〉されている。

最初と最後に設定されたサーカスの中の火の輪の場面对比することで、最初の「サーカスの中

の三つの火の輪の場面」と異なり、最後の「サーカスの中の五つの火の輪の場面」において「じんざ」は非在であっても、観客の心の中に存在していることに気づくことができるようになるだろう。

3 小学校3年生の子ども達の読みを生み出す『よだかの星』教材

『よだかの星』はかつて小学校・中学校・高等学校の教科書に採録されていた作品である。小学校では、小学校5年生や6年生の文学教材として読まれている⁸。小学校高学年の教科書に採録されていた作品ではあるものの、『よだかの星』の先行研究を見ると、小学校1年生～4年生の低学年から中学年の子ども達が『よだかの星』を読んだ感想や読みが提示されている⁹。小学校低学年から中学年の子どもの読み以下の通りである¹⁰。

- ・よだかのほしをよんだら、二どかおをあらいました。なみだがでてかおじゅうこぼれたからです。ぼくは「よだか」というとりはしりません。(中略)よだかはたかにごろされるより、じぶんでしんだほうがましだとおもって、さむいたかい空にのぼって、りんの火のような青いうつくしいひかりになって、しずかにもえました。いまでもまだもえているとかいてあります。ぼくはよだかがどうしてじさつしたか、かながえました(中略)よだかは、たかにむかっていくゆうきがなかったからです。よだかにおとうさんや、おかあさんや、ともだちがいたら、きつとしなかったでしょう。(後略) (小学1年生・男子)
- ・わたしも、何かで気もちがくじけそうなとき、よだかがどんな思いで、空にのぼっていったのか思い出して、せ中をびんとのぼしてがんばって行こうと思います。(小学2年生・女子)
- ・わたしたちの世の中のほんとうのしあわせはなにか。ほんとうのしあわせを考えることのたいせつさを、わたしはよだかから教えられた。(小学4年生・女子)

『よだかの星』は、小学校低学年から中学年の子どもであっても読むことができている。だが、もともと『よだかの星』は小学校高学年の文学教材として読まれている。また中学校や高等学校の教科書にも掲載されていた経緯を考慮すると、小学校低学年から中学年の子ども達が取り組みやすい文学教材とは言い難いだろう。

『よだかの星』は幾つもの絵本が出版されている。『よだかの星』の絵本に関しては木村東吉が詳しく分析している¹¹。幾つもある絵本の中で、村上康成に描かれた挿絵のある『よだかの星』(岩崎書店、2005年3月)は「一年生から読める」と銘打った帯が付いた絵本であった¹²。小学校の「一年生から読める」と帯に示されたように、本文はすべて大きな活字で印刷されて、総ルビで、欄外に語注をつけているだけではなく、童話風の絵が所々に挿入されていて、低学年の子ども達でも読めるように工夫されている。この『よだかの星』の絵本は、定本の文章をわかりやすい文体に直している。ただし、低学年の子ども達でも読めるように工夫されているとはいえ、定本となる文章を踏まえて作られているので、小学校中学年の子ども達は読むことができるが、低学年の子どもにとっては文章量が多いと思われる。

村上康成に描かれた挿絵のある『よだかの星』の絵本よりも、さらに小学校の低学年から中学年の子ども達に読みやすい教材として、「きつずちゅーぶ」が作成した読み聞かせの『よだかの星』を挙げるができる。読み聞かせの『よだかの星』は、You Tubeの公式ページにアップロードされ

ている¹³。読み聞かせの『よだかの星』は、定本をわかりやすい文章にまとめているり、童話風の絵を取り入れたりして、小学校の低学年から中学年の子ども達でも『よだかの星』を理解できるように工夫している。You Tube 版の『よだかの星』の本文は、次のように作品の主旨を簡潔にまとめている。

よだかは、とてもみにくい鳥でした。顔は、まだらで、くちばしは平たく耳までさけていました。足は、よぼよぼでまったく歩けません。よだかに会うと、ほかの鳥はとてもイヤそうな顔をして、そっぽを向きました。鷹はよだかの名前をいやがり、会うたびに「早く名前を変えろ。」とせまりました。

ある日、鷹がよだかの家へやって来て、「名前を市蔵に変えて、その名前を書いた札を首からぶら下げろ。」と言いました。「それはできません。」よだかがそう答えると、「できないなら、お前をつかみ殺してやる。」と脅して、自分の家へと飛び去って行きました。鷹が帰ると、よだかは目をつぶって考えました。(何も悪いことをしていないのに、見た目のせいでみんなに嫌われてしまう。ああ、ああ、つらいなあ……。)

よだかはとても心が苦しくなって、思わず夜の空へ飛び立ちました。口を大きく開いて、羽をまっすぐに張って、まるで矢のようによだかは空を横切りました。すると、いくつもの小さな虫が口の中に入ります。のどをもがいている虫を飲み込んだよだかは、なんだかひどく悲しい気持ちになり、大声をあげて泣き出しました。

泣きながら、空をぐるぐるめくり、「たくさんの虫がほくに殺されている。そんなほくはもうすぐ鷹に殺される。なんて悲しくてつらいことだ。ほくはもう虫を食べずに、飢えて死のう。でも、その前に鷹に殺されてしまう。ならば、遠くの空へ行ってしまう。」

よだかは遠くへ行く前に、弟のかわせみのところへお別れを告げに行きました。「兄さん。どうしたの。」「ほくはこれから遠くへ行くんだ。最後におまえの顔を見に来たよ。」「兄さん、そんなことを言わないでくれよ。」かわせみが止めると、「さよなら。」と言って、よだかは泣きながら自分の家へ帰りました。

自分の巣をきれいに片付け、羽を整えたよだかは、もう一度空へ飛び立ちました。もう空は夜明けです。よだかは、昇る太陽に「どうかあなたのところへ連れて行ってください。やけて死んでもかまいません。」と願いました。太陽はよだかを見つけると、「お前はよだかだな。ずいぶんとつらい思いをしてきたな。だが、お前は星の鳥じゃない。夜、もう一度飛んで星に頼んでみるといい。」そう言って遠くへ行ってしまう。よだかはそれを聞くと、急にぐらぐらして、とうとう野原の草の上に落ちてしまいました。しばらくして目を覚ますと、もう夜になっていました。

よだかはまた飛び立ちました。「お星さん、お星さん、どうか私をあなたのところへ連れて行ってください。やけて死んでもかまいません。」しかし、星たちは、よだかを相手にしませんでした。

よだかはどこまでも、どこまでも、まっすぐに空へのぼって行くと、寒さに息は白く凍りました。どんなに高くのぼっても、星にぜんぜん辿りつけません。寒さが、まるで剣のようによだかを刺しました。よだかには、もう飛ぶ力は残っていませんでした。よだかは涙ぐんだ目をあげてもう一ぺん空を見ました。その後はもう、落ちているのか、のぼっているのか、逆さになっているのか、上を向いているのかもわかりませんでした。

ただ、なぜだか心はとても穏やかでした。それからしばらく経って、よだかが目を覚ますと、自分の体が青く美しい光に包まれて、静かに燃えているのに気がつきました。横にはカシオペア座があります。天の川の青白い光はすぐ後ろにありました。

みにくかったよだかはきれいな星になったのです。いつまでも、いつまでも燃え続けるよだかは、今でも美しい星となって燃え続けているのでした。

[You Tube 版の『よだかの星』の本文]



[You Tube 版の『よだかの星』の画像(「よだか」が太陽に向かって飛行する場面)]



[You Tube 版の『よだかの星』の画像(「よだか」が青い美しい光に包まれている場面)]

小学校3年生を対象にした比べ読みの場合、村上康成によって描かれた『よだかの星』の絵本であっても、You Tube 版の読み聞かせの『よだかの星』であっても、どちらも教材として適している。子ども達の読む学力に応じて、You Tube 版読み聞かせか絵本かを選択するとよいだろう。どちらも多くの絵が挿入されていて、『よだかの星』を理解するのに役に立つ。

本稿では、作品の主旨をわかりやすく短く簡潔にまとめている You Tube 版の『よだかの星』と村上康成によって描かれた絵本の『よだかの星』を中心に比べ読みする教材として取り上げて、考察を進めていきたい。

4 『よだかの星』の教材分析

4-1 『よだかの星』の地上・地表空間の場面

『よだかの星』の先行研究において、この作品は「地上・地表」の場面と「天空」の場面の二つの場面から構成されていると指摘したのが遠藤祐である。

作中の出来事の成りたつ〈場〉の在り様をみても、地上と地表の空間に限られた前半に対して、後半のそれは地上から、はるかな天空へと拡がっている(中略)前半のそういう(稿者注・よ

だかが空を横切って飛ぶ) 水平飛行に対して、後半のよだかは、地面と天空とあいだに、上昇と落下をくり返す、という垂直の動きを示す。この異なった二様の動きも、物語の二部構造を支える骨格となっていると言っている。¹⁴ (傍点・原文ママ)

『よだかの星』は、前半の「地上・地表の空間」＝「よだか」の水平の動き、後半の「天空の空間」＝「よだか」の垂直の動き、という二つの空間にわけられる。つまり、『よだかの星』の物語構造は、空間による場面の設定や主人公の「よだか」の異なる飛び方の二つの観点から捉えることができる。遠藤は指摘する。遠藤が指摘するように、鷹から「市蔵」という名前に改名することを強要され、鳥として生きる道を奪われたよだかが悲嘆の涙を流して絶望感を抱えながら飛ぶのが、「地上・地表の空間」の場面である。この場面の中で、一匹のかぶと虫 (YouTube 版の『よだかの星』ではいくつもの小さな虫) が、よだかの喉の中に入った瞬間、よだかは自分の罪の意識を認識する。

よだかはとても心が苦しくなって、思わず夜の空へ飛び立ちました。口を大きく開いて、羽をまっすぐに張って、まるで矢のようによだかは空を横切りました。すると、いくつもの小さな虫が口の中に入ります。のどをもがいている虫を飲み込んだよだかは、なんだかひどく悲しい気持ちになり、大声をあげて泣き出しました。

泣きながら、空をぐるぐるとめぐり、「たくさんの虫がぼくに殺されている。そんなぼくはもうすぐ鷹に殺される。なんて悲しくてつらいことだ。ぼくはもう虫を食べずに、飢えて死のう。でも、その前に鷹に殺されてしまう。ならば、遠くの空へ行ってしまう。」

もがきながら死んで逝く虫を通して、「よだか」は自分の死と直面する。「よだか」は生きているものの犠牲の上に立って生きていることを知る。「よだか」は自分が殺されるかもしれない立場になって、初めて殺されることの恐怖を感じると同時に、自分に殺されていた小さな虫たちの気持ちを理解することができたのである。自分の罪の意識に苛まれた「よだか」の今の自分ができ得る解決策が「ぼくはもう虫を食べずに、飢えて死のう」という考えであった。自分の罪意識を認識し、今の自分がいる居た堪れない状況から解放されたいと願った「よだか」は、「遠くの空の向こうに行ってしまう」と決意する。この「よだか」の決意が「よだかの認識の変革」¹⁵ となって、「よだか」に主体的な行動を駆り立てさせることになる。

4-2 『よだかの星』の天空空間の場面

弱者 (小さな虫たち) の生命を奪わなければ生きることのできない自分の罪意識 (食物連鎖による生きるためには逃れられない宿命) を認識し、今の自分がいる状況から解放されたいと願った「よだか」は、自らの願いを実現するために動き出す。

「よだか」は、西→南→北→東へと四方の空を飛び回って、いずれの星にも「連れて行ってください。」と懇願する。しかし、四方の星から無視・蔑視・嘲弄・差別を受けて、「よだか」は星々に相手にされないことを思い知らされる¹⁶。「よだか」は天空の世界も地上の世界と変わらないことを実感するのである。四方の星々に、「よだか」は「どうか私をあなたのところへ連れて行ってください。やけて死んでもかまいません。」と懇願するのだが、どの星からも拒絶されてしまう。YouTube

版の『よだかの星』には、どの星からも拒絶された時のよだかの様子の記述はないが、村上康成によって描かれた『よだかの星』の絵本では、星々に拒絶される度に、「がっかりして、よろよろおちる「よだか」の文章がある。すべての星に拒絶された「よだか」はすっかり力を落としてしまって、羽を閉じて、地に落ちて行くのだが、「もう一尺で地面にそのよわい足がつくというとき、よだかにはわかきのろしのようにそらへととびあがる。『よだかの星』では、のろしのように空へと飛び上がった時、「よだか」の変容を見ることができる。You Tube 版の『よだかの星』では、「よだか」の行動を以下のように表している。

よだかはどこまでも、どこまでも、まっすぐに空へのぼって行くと、寒さに息は白く凍りました。どんなに高く昇っても、星にぜんぜん辿りつけません。寒さが、まるで剣のようによだかを刺しました。よだかには、もう飛ぶ力は残っていませんでした。

よだかは涙ぐんだ目をあげてもう一ぺん空を見ました。その後はもう、落ちているのか、のぼっているのか、逆さになっているのか、上を向いているのかもわかりませんでした。ただ、なぜだか心はとても穏やかでした。

それからしばらく経って、よだかが目を覚ますと、自分の体が青く美しい光に包まれて、静かに燃えているのに気がつきました。

横にはカシオペア座があります。天の川の青白い光はすぐ後ろにありました。

みにくかったよだかはきれいな星になったのです。いつまでも、いつまでも燃え続けるよだかは、今でも美しい星となって燃え続けているのでした。 (下線＝引用者)

地に落ちる瞬間、のろしのように空へと飛び上がった「よだか」は「どこまでも、どこまでも、まっすぐに空へとぼって」く。空へまっすぐに飛翔する「よだか」は、木村功が指摘するように、受動的な「ある」存在から、能動的な「なる」存在へと変化を遂げた¹⁷。「連れて行ってください。」と他者に依存するのではなく、「よだか」は主体的に自ら天空へ飛翔する。私たち読者は「醜い」と鳥たちに蔑まれながらも、弱者に対して思い遣る気持ちを忘れない純粋で心の美しい「よだか」が、自らの死の覚悟を決めてから、幾度、拒絶されてもあきらめることなく、気力を振りしぼって懸命に空へ飛翔する姿に感銘を受ける。空へまっすぐに飛翔する「よだか」の行動から、虫を食べないで飢えて死ぬことが、自分にでき得る最善の策であることを信じる「よだか」の決意を読みとることができる。寒さで羽がしびれても動かし続け、つらさで涙が込み上げても、上昇することをやめない「よだか」の決意は、読者の想像の域を超えたものであるだろう。だからこそ、「よだか」の懸命な姿に心を打たれ、「よだか」の心が穏やかな（絵本では「やすらか」で「少しわらって」と表現している）最期の様子を、多くの読者は安堵を覚える。

一見すると、「よだか」は可哀想で不憫な存在だと受け取られる。だが、本当にそうなのだろうか。最期の「よだか」は心が穏やかであった。詳しく言うと、「やすらか」で「少しわらって」いたのである。最期の「よだか」の面もちは重要である。「よだか」の「やすらか」で「少しわらって」いた様相について、遠藤祐は「おのれの為すべきことを成しとげたとする思いのもたらしたものに、ほかなるまい」¹⁸と指摘している。幾度も拒絶されて、涙を流しながらもあきらめずに、空へ飛翔した「よだか」は、ついに天空の星となる。〈よだかの星〉の誕生である。よだかの星は「青く美しい光に包まれ」た美しい星となった。青い美しい光を放つ星となった「よだか」は、これまでのよう

な醜い容貌ではない。

「よだか」は生まれつき醜い鳥であった。その醜さゆえに、鳥たちの世界の中で傷つけられたり、蔑視されたりしてきた。鷹にいたっては、「よだか」という名前を改名しろと威嚇する。「よだか」にとって改名することは、もはや鳥として生きる道を断たれることを意味する¹⁹。「よだか」が自分の醜い容貌によって引き起こされる苦しみにもがいている最中、弱者の生命を奪わなければ生きることのできない宿命ともいえる罪意識に気づかされる。青い美しい光を放つ星へと転生した「よだか」は、容貌の醜さだけではなく、弱者の生命を奪わなければ生きられないという罪意識からも解放される。「よだか」の「やすらか」で「少しわらって」いる面もちは、容貌の醜さから解放されたいという願望、そして食物連鎖によって生じる罪意識に対して、自分が解決し得る最善策を成し遂げたことの「よだか」の達成感や満足感の表れであろう。

5 『サーカスのライオン』と『よだかの星』における比べ読みの有用性

5-1 作品構造の観点からの考察

浜本純逸は、複数の教材を比べて読むことで『『ある人物が何かに出会って変わっていく』』という物語の型に気づかせ、そのことを通して作品の『読み方』を学ばせたい²⁰と言及している。すなわち、複数の教材の比べ読みによって、物語（小説）の中心となる人物が変容するところに着目する読み方を習得できる。中心となる人物の変容に着目する読み方は、作品構造に目を向けた読み方となる。

『サーカスのライオン』で言えば、物語の中心人物は「じんざ」であるので、「じんざ」が変容するところに着目させたい。『サーカスのライオン』の中で「じんざ」が大きく変容するきっかけになるのは、「じんざ」が「男の子」を救い出すために炎の中に飛び込む場面である。この火事の場面は、『サーカスのライオン』のクライマックスにあたる。ここで注目したいのは、火事になったのが、石垣の上の高い場所にあるアパートという点である。「じんざ」が「男の子」を救出するためには、高い場所にあるアパートまで上がっていかなければならない。「だめだ。中へは、もう入れやしない。」という声を聞いた「じんざ」は、「ぱっと火の中へとびこ」む。「じんざ」が炎の中に飛び込むのは主体的な行動である。石垣の上にある高い場所だけではなく、「じんざ」がさらにその高い場所の階段を駆け上って行くことで、「男の子」を見つけ出すことができている²¹。

一方、『よだかの星』の中心人物は「よだか」である。『サーカスのライオン』そして『よだかの星』というタイトルから、両作品における中心人物を容易に把握することができる。『よだかの星』の中で「よだか」が変容するのは、「よだか」が「どこまでも、どこまでも、まっすぐに空へとのぼって」いく場面である。この場面での「よだか」は主体的に自ら天空へと飛翔する。自分の意志で天空へ向かっていくのである。『よだかの星』では、「よだか」が受動的な「ある」存在から、能動的な「なる」存在へと変化を遂げた場面²²がクライマックスにあたる。変化を遂げた時の「よだか」は主体的な行動者となる。

石垣の上にある高い場所だけではなく、さらにその空間の中の高い場所に行くための階段を駆け上る「じんざ」の行動、そして「よだか」の天空へ飛翔する行動は、どちらも主体的な行動となっている。変容する場面において、「じんざ」は石垣や階段を駆け上がっており、そして「よだか」は天空へと上昇する。「上がる」という行動の形態を考慮すると、遠藤祐の『よだかの星』は「主人公の水平と垂直の動きが物語を二分する」²³という指摘は、『サーカスのライオン』にも当てはめることが可能である。つまり、『サーカスのライオン』の最初の「サーカスの中の三つの火の輪の場面」

と最後の「サーカスの中の五つの火の輪の場面」では、「じんざ」の行動の形態は火の輪をくぐり抜ける「平行」行動であるのだが、「じんざ」が変容する「サーカスの外の世界」の場面では、「じんざ」は上へあがる「垂直」行動をしていると捉えることができる。このように中心人物の行動形態の違いによって場面を分けて考えることが可能である。このように中心人物の行動形態の違いから場面を分ける読み方は、新たな視点からの読み方になる。だが、子ども達にとっては難しいかもしれない。

その場合、比べ読みによって、子ども達に中心人物が主体的に行動するところで、中心人物が大きく変容することに気づかせたい。中心人物が大きく変容するところは、『サーカスのライオン』と『よだかの星』においてクライマックスにあたる。両作品を比べて読むことで、「中心となる人物の変容」に着目する読みの方略や、作品の「クライマックス」に着目する読みの方略を習得することが期待できる。

5-2 物語内容の観点からの考察

『サーカスのライオン』の「じんざ」は、かつて自分がいたアフリカの草原を走ったり、アフリカにいる家族に再会したりすることを夢見ている。「じんざ」は曲芸をするライオンとしてサーカスにいるのだが、もともとライオンのいるべき場所ではない。他方、『よだかの星』の「よだか」は、鳥の世界において自分のいるべき居場所がなかった。鳥たちに蔑まれて自分のいるべき場所を喪失している。「じんざ」も「よだか」も今の自分がいる現実の世界から解放されたいと願っている。現実の世界から解放されたいという願いが、「じんざ」と「よだか」の主体的な行動の要因となっている。

「じんざ」の場合、燃え盛る火の中でも「男の子」を救い出したいという強い思いが、「じんざ」を突き動かす。火災で命を落としてしまったら、自分のように、「男の子」は再び家族に会うことができなくなることを懸念し、とっさに「男の子」を救うために炎の中に飛び込むのである。言い換えると、アフリカの地ではなく、サーカスにいる「じんざ」は、「男の子」が抱えている孤独感や寂しさを自分と重ねている。「男の子」にチョコレートをもらったことが、炎の中にいる「男の子」を救い出す主な要因ではないのである。他者の気持ちを察しているのは「よだか」も同様であった。

「よだか」の罪意識は、羽虫やかぶと虫（他者）の逃れられない境遇から生み出される弱者の感情を理解したことによる。罪意識に苛まれた「よだか」は「ぼくはもう虫を食べずに、飢えて死のう」と決意する。結果的に、「じんざ」と「よだか」は自己が犠牲となって命を落とすことになった。「よだか」は自らの意志で飢えて死ぬことを選択する。一方、「じんざ」はとっさに炎の中に飛び込んだ時、「男の子」を見つけ出して、「男の子」を抱えながら自分自身も無事に火事現場から抜け出るつもりであったと思われる。しかし、火事となったアパートは高い場所にあるために、「じんざ」は飛び降りることができない。「じんざ」は「男の子」を救いたい一心で、力のある限り「ウオーツ」と叫ぶ。この「じんざ」の叫びによって「男の子」は救出された。自己が犠牲になったとしても、「じんざ」は「男の子」（他者）を救命したいという思いを達成することができたのである。「じんざ」も「よだか」も悲願を達成する。そのことで、「じんざ」は「ぴかぴかにかがや」いて「金色に光」っている姿になり、「よだか」は「青く美しい」光を放つ星になる。「じんざ」の光り輝く金色や「よだか」の美しい青色は、両者の達成感や満足感を表す色である。

このように『サーカスのライオン』と『よだかの星』には、中心人物が「本来いるべき居場所の喪失」、「現実から解放されたいという願い」、「他者への思い」、「悲願の達成」、達成感や満足感を表

す「色」など類似する観点がある。これらの観点の他に、注目したい観点が「死からの再生」である。『サーカスのライオン』の場合、「じんざ」が非在であるにもかかわらず、サーカスの最終日に「ライオンつかいのおじさん」は「じんざ」がくぐり抜けるはずであった五つの火の輪を用意する。そして、「じんざ」がくぐり抜けるはずだった非在の五つの火の輪に対して観客は手をたたいている。これは「ライオンつかいのおじさん」や観客の心の中に「じんざ」が存在していることを表している。「ライオンつかいのおじさん」や観客の心の中で「じんざ」は生きているのである。他方、『よだかの星』では、「よだか」の死後、青い美しい光を放つ星になって誕生する。そして今でも燃え続けている。つまり、『サーカスのライオン』も『よだかの星』も、中心人物が命を落とした後の情景にも意味合いがある。「じんざ」においても、「よだか」においても「死からの再生」が物語の最後に表出されている。

6 結語

本稿では、『サーカスのライオン』を三つの場面にわけて考察を行った。場面で分けることによって、最初と最後に設定されたサーカスの中の火の輪の場面について対比的な読み方が可能になること、そして最期の場面の意味について考え、読みを深められることが期待できる。そして、最初と最後の場面の中間にある「サーカスの外の世界」の場面の「じんざ」の変容に目を向けやすくなる。「じんざ」が変容した姿の「ぴかぴか」に輝く金色と最後の場面を併せて考えるきっかけにつながる。

子ども達が感想に書いているように、「じんざ」は「男の子」からチョコレートをもらったから炎の中に飛び込んで救い出したのではないし、「男の子」と出会わなければ死なずにすんだとも「じんざ」は思っていない。このような子ども達の読みは自分の経験から生み出されたものであろう。自分の経験を踏まえて読みを構築することは大切である。だが、その読みが作品の文章に書かれていることに目を向けることなく、自分の経験だけで作り上げた読みであれば、その読みは恣意的な感想でしかない。『サーカスのライオン』では、「じんざ」が非在となった「サーカスの中の五つの火の輪」の場面が設定されていることに意味がある。この最後の場面を含めて『サーカスのライオン』という一つの作品が作り上げられているのだが、最後の場面に着目して読みを構築する子どもは多くはない。『サーカスのライオン』の先行研究には、自分の経験のみで作った子どもの読みがいくつも報告されている。子ども達に作品の中の〈しかけ〉に気づかせるためには、文章にかかっていることや場面の設定の〈しかけ〉などをしっかりと読み込む力が求められる。

一つの文学教材を読んだだけでは、その作品の大切になるところや特徴に気づくことが難しくても、複数の作品（文学教材）を比べて読むことで、それぞれの文学教材の類似点や相違点といった観点を見いだすことができるようになる。『サーカスのライオン』と『よだかの星』を比べて読む場合、『サーカスのライオン』や『よだかの星』のように登場人物がタイトルになっていることの意味、中心人物が「本来いるべき居場所の喪失」、「現実から解放されたいという願い」、「他者への思い」、「悲願の達成」、達成感や満足感を表す「色」、「死からの再生」といった類似する観点に着目できるようになると想定される。また中心人物の「行動の形態」や「大きく変容する」場面にあたる「クライマックス」に着目することで作品の構造にも気づくことも可能になるだろう。これらの観点は『サーカスのライオン』を理解する上で重要な観点となる。もちろん『よだかの星』を理解する際にも役に立つ。作品の観点に気づくことは作品の内容や作品構造を理解するのに大切である。子ども達は理解を深められる読み方を学ぶことになる。

本稿は小学3年生を対象にして考察したために、比べて読む文学教材として、村上康成によって描かれた『よだかの星』の絵本や You Tube 版の『よだかの星』を取り上げた。とりわけ You Tube 版の『よだかの星』を中心とした考察を行った。中学生を対象にする場合、国語の教科書の『よだかの星』の読みを深めるために、かつて学んだ小学校教材の『サーカスのライオン』を比べて読むことは有効になると考えられる。本稿が提案した『サーカスのライオン』と『よだかの星』との比べ読みは、『サーカスのライオン』における課題から脱却するためのひとつの指導法だけに留まるものではない。複数の文学教材を読むことで見いだせる観点や特徴を、複眼的に思考することは、作品の本文を読み取った上で自分の考えや経験を踏まえた〈読み〉へと発展する。その読みは作品（文学教材）を批判する力となる。文学教材を比べて読むことは、『サーカスのライオン』と『よだかの星』との比べ読みを考察してきたことからわかるように、有用性を十分に認めることができるのである。

【注】

1. 2019年8月30日～9月13日の間、国立大学附属小学校3年1組（男子17名、女子17名）で実践した『サーカスのライオン』の授業を参観させていただいた。
2. 『新編新しい国語教師用指導書』（東京書籍、2015年、p.30）
3. 注2に同じ（p.30）
4. 『サーカスのライオン』の研究論文および実践報告が数少ない中で、永田麻詠「インクルーシブな国語科授業の検討ー「サーカスのライオン」の授業実践を手がかりにー」（『日本教科教育学会誌』第40巻第1号、日本教科教育学会、2017年）、白瀬浩司・白谷佳苗・平田莉恵・佐野叶恵『小学校国語科教材分析と授業実践事例ー『サーカスのライオン』・『ゆうすげ村の小さな旅館』・『はりねずみと金貨』の場合ー』（『九州女子大学紀要』第53巻2号、2017年）、原陽子・竹内元「つぶやきを拾う授業の構想に関する研究(1)「サーカスのライオン」の教材解釈を通して」（『宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要』第19巻、2011年）、周才規子「学ぶことに楽しさがある授業をめざしてー「サーカスのライオン」の学習を通してー」（『学思会』、2010年）等の研究論文や実践報告には、子ども達は「男の子」からチョコレートもらったことで、「じんご」は炎の中に飛び込んで救い出したと捉えていることが報告されている。
5. 周才規子「学ぶことに楽しさがある授業をめざしてー「サーカスのライオン」の学習を通してー」（『学思会』、2010年3月、p.27）周才教諭の授業では、紙芝居をつくることを目指して、子ども達に「じんご」の心情の変化を読み取らせている。実践報告のタイトルにあるように、子ども達が紙芝居をつくることを通して楽しく学んでいるところに周才教諭の授業は注目できる。
6. 白瀬浩司・白谷佳苗・平田莉恵・佐野叶恵『小学校国語科教材分析と授業実践事例ー『サーカスのライオン』・『ゆうすげ村の小さな旅館』・『はりねずみと金貨』の場合ー』（『九州女子大学紀要』第53巻2号、2017年、pp.173-174）白瀬らの論考によると、子ども達は「男の子と出会わなければじんごは死なずに済んだのではないだろうか」と受け取ったことが報告されている。
7. 『サーカスのライオン』の指導書については注2に同じである。先行研究については、周才規子「学ぶことに楽しさがある授業をめざしてー「サーカスのライオン」の学習を通してー」（『学思会』、2010年3月）、原陽子・竹内元「つぶやきを拾う授業の構想に関する研究(1)「サーカスのライオン」の教材解釈を通して」（『宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要』第19巻、2011年）がある。これらの論考は「時」に着目して場面を分けている。
8. 『国語5年下』（二葉、1958年発行）。この他に『標準小学国語6下』（教育出版、1959年発行）などがある。

中学校では主に三省堂・教育出版・学校図書等の中学校1年生の国語教科書に掲載されていた。

9. 大藤幹夫『賢治童話への子どもの視点－「よだかの星」を中心に－』（『学大国文』第36巻、大阪学芸大学国語国文研究室、1993年）、牛山恵『子どもが読む「よだかの星」－擬制を撃つ－』（『日本文学』第52巻第3号、日本文学協会、2003年）等には、小学校1年生からの子どもの『よだかの星』の読みが掲載されている。
10. 大藤幹夫『賢治童話への子どもの視点－「よだかの星」を中心に－』（『学大国文』第36巻、大阪学芸大学国語国文研究室、1993年、pp.68-77）
11. 木村東吉「宮沢賢治童話絵本の研究－「よだかの星」の場合－」（『中国学園紀要』第6号、中国学園大学・中国短期大学、2007年）
12. 注11に同じ（p.57） 宮沢賢治作・村上康成絵『よだかの星』（岩崎書店、2005年3月）
13. You Tube版の『よだかの星』は、童話風の絵が多く組み込まれた約7分間の読み聞かせである点を考慮すると、授業に取り入れやすい教材であるといえる。
<https://www.youtube.com/watch?v=HscQTgqYYBY>（2020年5月11日確認済み）
14. 遠藤祐「ひとすじの物語－〈よだかの星〉はいかにして夜空にうまれたか－」（『学苑』第750号、昭和女子大学、2003年、p.7）
15. 中川すみ江「教材研究『よだかの星』－主体よみの立場から－」（『日本文学』第12巻第4号、日本文学協会、1963年、p.23）
16. 木村功「教科書教材を「読む」・宮沢賢治「よだかの星」論－「ある」ことから「なる」ことへ－」（『岡山大学教育学部研究集録』第126号、岡山大学教育学部、2004年、p.15）
17. 注16に同じ（pp.16-17）
18. 注14に同じ（p.21）
19. 牛山恵は、鷹がよだかに提示したおよそ鳥らしくない「市蔵」という名前の改名の強要は、よだかを鳥の仲間から完全に追放しようとする目論見であると指摘している。（牛山恵『子どもが読む「よだかの星」－擬制を撃つ－』（『日本文学』第52巻第3号、日本文学協会、2003年、p.6）
20. 浜本純逸「複数教材で学習を支援する」（『現代教育科学』第457号、明治図書、1994年12月、p.50）
21. 東京書籍の教科書の『サーカスのライオン』の西村達馬の挿絵には、「じんご」が燃え盛る階段を駆け上がる様子が描かれている。（『新編 新しい国語 三下』、2014年3月検定済みの教科書）
22. 注16に同じ（pp.16-17）
23. 注14に同じ（p.7）

【付記】

本稿で引用した画像は You Tube 版の『よだかの星』（「きつずちゅーぶ」による作成）から一部を引用している。

本稿は、JSPS 科研費 20K13975 の助成を受けたものである。
記して、厚くお礼申し上げます。

（宮崎大学）